

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02421

研究課題名(和文)近代日本の少年/少女雑誌の投稿文化と中学校/高等女学校の作文教育の比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Correspondence Culture of Boys' and Girls' Magazine and Composition Education of Middle Schools and Girls' Middle Schools in Modern Japan

研究代表者

今田 絵里香 (Imada, Erika)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：50536589

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：作文投稿雑誌『穎才新誌』廃刊後の1900年前後、複数の少年少女雑誌が刊行され、投稿文化を盛んにさせた。『日本少年』の投稿は男子投稿者によって、名誉に繋がるものとしてとらえられていた。そこでは、国家の有用な人間になることと詩文に秀でた人間になることが一致してとらえられていた。一方、『少女の友』の投稿は女子投稿者によって投稿者同士の交際に不可欠なものとしてとらえられていた。女子の場合、文芸作品の掲載は学校において批判されることがあった。よって女子は本名を隠し、雑誌の上だけで称賛されることを目指した。『少女の友』では、常連投稿者は投稿者にも編集者にもスター扱いされ、大勢の支持者を獲得していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、教育における男女平等の推進は重要な課題となっている。その推進のため、教育社会学の「ジェンダーと教育」研究は、教育にどのような男女不平等に関する問題があるのかを明らかにしてきた。ただしその研究のほとんどが学校教育を扱う研究である。子どもを巡るジェンダー秩序を明らかにするには、学校教育だけでなく、少年少女文化も扱うことが不可欠である。本研究は「ジェンダーと教育」研究に連なる歴史社会学研究として、戦前日本の学校教育、および少年少女雑誌文化がどのようにして男女不平等な文化を生み出したのか、またその文化がどのようにして現代日本の教育に継承されたのかを歴史的に解き明かしていくものである。

研究成果の概要(英文)：After the discontinuance of the Contributed Magazines Eisaishinshi around 1900, many other boys' and girls' magazines were published, which greatly expanded this magazine correspondence culture. The young men contributing to Nihon Shonen were in search of prestige. It was thought that becoming skilled in literature and becoming a good servant for the nation were one and the same.

For young girls contributing to Shojjo no Tomo on the other hand, the companionship with other contributors was essential. In the case of girls, schools criticized the publication of their literary works. Therefore, female contributors hid their real names and only aimed at receiving praise within the magazine. In Shojjo no Tomo, regular contributors gained many supporters and both editors and other contributors and treated them as celebrities.

研究分野：教育社会学

キーワード：少年雑誌 少女雑誌 高等女学校 中学校 作文教育 投稿文化 ジェンダー メディア

1. 研究開始当初の背景

1870年代、作文投稿雑誌が生まれ、中間層以上の階層の少年少女が、それらの雑誌に文芸作品を投稿しはじめた。そして、1900年代の前後、作文投稿雑誌に代わって少年/少女雑誌が生まれ、ひきつづき、中間層以上の階層の少年少女が、それらの雑誌に文芸作品を投稿するようになった。たとえば、『日本少年』(実業之日本社)の1910年1月号の作文投稿数は2万19作品であった。このような投稿文化の隆盛は、作文教育によってもたらされたものである。1870~1890年代、作文教育は「形式主義」の教育が実施されていた。このような作文教育は、漢詩文・模範文を覚え、それを模倣して文章を書くことが期待された近世のエリート文化(武士の教養)・漢文脈系譜の明治普通文の文章を書くことが期待された近代のエリート文化(学歴エリートの証)によって支持されていた。

ところが、1920~1930年代、少年雑誌においては、投稿文化がしだいに衰退していった。このような少年雑誌における投稿文化の衰退もまた、作文教育によってもたらされたものである。芦田恵之助が「随意選題」の作文教育を提唱したことがきっかけとなって、見たまま・ありのままを書かせる「自由発表主義」の作文教育が急速に広まった。それによって、少年雑誌が価値を置いていた投書行動、すなわち抒情を理解し、その抒情を巧みに文芸作品にあらわすという投書行動が、「子どもらしくない」として、批判されたのである。

しかし、少年/少女雑誌に関する先行研究においては、少年/少女雑誌の投稿文化を比較した研究は、ほとんどない。また、少年/少女雑誌の投稿文化と作文教育の関連を明らかにした研究についても、ほとんどない。さらに、作文教育に関する先行研究においては、主に、初等教育の作文教育について、東京高等師範学校附属小学校を中心とした師範学校附属小学校の教育実践、私学の教育実践、『赤い鳥』(赤い鳥社)の実践、1930年代の東北・北海道における「生活綴方」の教育実践に関して研究が重ねられてきた。しかし、中等教育の作文教育に関する研究は少ない。まして、中学校/高等女学校の作文教育を比較した研究は、ほとんどない。

申請者はこれまで戦前日本の「少年」「少女」というカテゴリーとその内実を明らかにしてきた。主に少年/少女雑誌によって創出され、意味を与えられた「少年」「少女」というカテゴリーは、都市新中間層の男子・女子を表象する記号として用いられてきた。先行研究によると、この都市新中間層の男子・女子は、大人たちによって近代家族的な「子ども」として捉えられ、愛護と教育を与えられる存在としてとらえられていたといわれている。しかし先行研究ではその「子ども」にジェンダーによる差異があるとはみなしてこなかった。申請者はそれに疑問を投げ掛け、その「子ども」が大人たちによってジェンダー化された「少年」「少女」として捉えられていたことを明らかにした。さらに、その「少年」はもともと男女を含意するものであったこと、そしてそこからジェンダー化された「少年」「少女」が生み出され、「少年らしさ」と「少女らしさ」が異なるものとして位置づけられていったことを解き明かした。また「少女らしさ」が時代とともに変化していったことも明らかにした(今田絵里香『「少女」の社会史』勁草書房、2007年)。

しかし、この研究では、少年/少女雑誌の投稿文化については、明らかにできなかった。ただし、1900、1910年代、投稿文化における「少年らしさ」はセンチメンタリズムと不可分であったこと、しかし、1920、1930年代、投稿文化における「少年らしさ」はセンチメンタリズムから切り離されたこと、代わりに投稿文化における「少女らしさ」がセンチメンタリズムと不可分になったこと、この三点については把握することができた(今田絵里香『少年雑誌におけるセンチメンタリズムの排除 1930年代の『日本少年』・『少女の友』投稿欄の比較から』『女性学』第11号、86-106頁、2004年)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)近代日本の少年/少女雑誌の投稿文化を比較し、(2)近代日本の中学校/高等女学校の作文教育の実践を比較することである。そして、この比較研究によって、本研究では、そこにおいて作られた「少年」/「少女」というジェンダーを明らかにする。そのとき、(1)1870~1910年代、少年/少女雑誌、および、作文教育のセンチメンタリズムはどのようにして形作られたのか、(2)1920~30年代、少年/少女雑誌、および、作文教育のセンチメンタリズムは、「少年らしさ」からどのようにして切り離されたのか、(3)1920~30年代、少年/少女雑誌、および、作文教育のセンチメンタリズムは、「少女らしさ」にどのようにして包含されるようになったのかという問いを解き明かすこととする。

3. 研究の方法

少年/少女雑誌の投稿文化、および、中学校/高等女学校の作文に着目する。具体的な作業として、少年/少女雑誌の投稿欄における創作指導の内実、少年/少女雑誌の投稿欄に投稿していた男子/女子の投稿文化、中学校/高等女学校の作文教育の内実、男子/女子の作文教育の受容、中学校/高等女学校の作文と少年/少女雑誌の投稿文の関係の5点を明らかにする。については、投稿欄に力を入れていた『日本少年』『少女の友』(実業之日本社)を中心にして投稿欄を分析することにする。一方、については、当時使われていた作文教科書の中

心に分析することにする。そのとき、近代日本の少年／少女雑誌、および、中学校／高等女学校の作文教育を明らかにするため、植民地時代の韓国における少年／少女雑誌、男子／女子の中等教育の作文教育も明らかにすることとする。最後に、は、～ の史料を組み合わせることにする。分析する期間は1900年～1945年である。始点を少年／少女雑誌が生まれた1900年代、終点を総力戦終結の年としたためである。

4. 研究成果

1888年、日本初の少年雑誌の『少年園』が生まれた。少年雑誌がおこなったことは、子どものメディアを「少年」のメディアと名付けることであった。それまで子どものメディアは無名のメディアであった。その無名のメディアに「少年」のメディアという名前を付けたのであった。

少年雑誌は子どものメディアを「少年」のメディアとして名付けた。そして、子どもを「少年」として名付けた。しかし、少年雑誌はその「少年」がどのようなものを明確化することはできなかったものであった。

『少年園』が生まれた後、『少年世界』『日本少年』『少年倶楽部』など、多数の少年雑誌が生まれた。その少年雑誌は、第一に「少年」のための読みものを主に載せていた。第二に「少年」という言葉を雑誌名に入れていた。

一方、1902年、日本初の少女雑誌が生まれた。それが『少女界』であった。『少女界』が生まれた後、『少女世界』『少女の友』『少女画報』『少女倶楽部』など、多数の少女雑誌が生まれた。その少女雑誌は、第一に「少女」のための読みものを主に載せていた。第二に「少女」という言葉を雑誌名に入れていた。

なぜ少女雑誌は生まれたのだろうか。この「最初に少年雑誌、次に少女雑誌が生まれた」という雑誌における変遷の背後にあったのは、「少年」「少女」の言葉における変遷であった。もともと、「少年」という言葉は男子・女子を含む言葉として使われていた。しかし、「少女」が「少年」から分離して、「少年」が男子、「少女」が女子を意味するものになったのであった。

このように、「少年」のメディアは、「少年」「少女」のメディアになったのであった。これに伴って、「少年」は、ジェンダーに関しては明確化されることになった。したがって、「少年」は男子、「少女」は女子を意味するようになったのであった。

この『少年』のメディアから『少年』『少女』のメディアへの転換の背後にあったのは、中等教育の男女別学化であった。1879年9月の教育令は、中等教育機関を男女別学とした。さらに、1886年3月の中学校令は男子の中等教育機関を制度化した。また、1899年2月の高等女学校令は女子の中等教育機関を制度化した。このように、男子・女子が異なる道に進むようになったことで、「少年」から「少女」が切り離されて、「少年」が男子、「少女」が女子を意味するようになったのであった。さらに、「少年」は後の時代と連続する存在として、「少女」は後の時代と断続する存在としてとらえられるようになったのであった。なぜなら、この男女別学化によって、男子には進学の道、職業獲得の道が制度化されることになったが、女子には、進学の道、職業獲得の道がごく限られたものになったからであった。男子・女子が「中学生」「女学生」として異なる道に進むようになると、そしてその「中学生」「女学生」が増大するようになると、男子・女子に異なるニーズが生まれることになる。そこで出版社は、男子には少年雑誌を、女子には少女雑誌を作ったのである。そして、この少年雑誌・少女雑誌をとおして、男子には「少年」、女子には「少女」という名称を付与したのである。

このように、メディアは、「少年」から「少女」を切り離して、少年雑誌から少女雑誌を切り離した。そして、少年雑誌・少女雑誌を生み出した。さらに、男子に「少年」、女子に「少女」という名称を付与した。ただし、メディアは「少年」「少女」の意味を明確化するには至っていなかった。

その後、1900年代には『少年世界』『少女世界』が、1910年代には『日本少年』『少女の友』が、商業上の成功を収めて少年少女雑誌界の頂点に君臨するようになった。

この『少年世界』『少女世界』から『日本少年』『少女の友』への転換の背後にあったのは、第一に子ども向けの読みものの変化、いいかえると、『お伽噺』から『少年小説』『少女小説』への変化であった。「お伽噺」は、「少年文学」叢書、さらには『少年世界』『少女世界』をとおして人びとの間に広まっていた。しかし、その「お伽噺」はわたしたちのおもうところの児童文学とは異なるものであった。「お伽噺」は、一つに硯友社の作家を用い、二つに文語体を使い、三つに残酷な事柄・性的な事柄などの大人の事柄を描いていた。したがって、「お伽噺」は「大人」と「少年」「少女」を区別する視点をもたなかったものであった。一方、「少年小説」「少女小説」は、「愛子叢書」、さらには『日本少年』『少女の友』をとおして、人びとの間に広まっていた。そして、その「少年小説」「少女小説」はわたしたちがおもうところの児童文学そのものであった。一つに文壇で名声を得ている作家を用い、二つに言文一致体を使い、三つに残酷な事柄・性的な事柄などの大人の事柄を排除していた。したがって、「少年小説」「少女小説」は「大人」と「少年」「少女」を区別する視点をもっていたのであった。

『少年世界』『少女世界』から『日本少年』『少女の友』への転換の背後にあったのは、第二に文の内容の変化であった。『日本少年』『少女の友』は、一つに写生主義、二つに童心主義を標榜して、「少年」「少女」の見たまま、おもったままの文を讃美していたのであった。

第一の変化は、子どもたちに読ませるものの変化である。第二の変化は、子どもたちに書かせるものの変化である。したがって、「愛子叢書」、および『日本少年』『少女の友』は、子どもた

ちに読ませるもの、書かせるもの、どちらの方向においても、「大人」と異なるものとして「少年」「少女」を明確化したのである。いいかえると、『日本少年』『少女の友』は、子どもにふさわしい文体、および子どもにふさわしい内容の文を明確化したのである。

このように、『日本少年』『少女の友』は、『少年世界』『少女世界』と異なる戦略をもっていたのであった。なぜなら、少年少女雑誌が商業上の成功を収めるためには、ライバルの少年少女雑誌と差異化をはかることが不可欠だったからであった。その結果、『日本少年』『少女の友』のほう人が人びとに支持されることになった。

その背後にあったのは、1910年代の都市新中間層の量的拡大である。この量的拡大を遂げた都市新中間層が、『日本少年』『少女の友』を購読したのである。なぜなら、都市新中間層は、第一に教育主義、第二に童心主義のまなざしをもっていたからである。教育主義のまなざしとは、子どもに教育を受けさせることに価値を見出すもので、童心主義のまなざしとは、大人と子どもを区別して、子どもを純真無垢な存在として称揚するものである。そして、『日本少年』『少女の友』は童心主義のまなざしをもっていた。さらに、その『日本少年』『少女の友』の童心主義のまなざしは、都市新中間層の童心主義のまなざしと一致していたのである。『日本少年』『少女の友』は、「少年小説」「少女小説」とおして大人と「少年」「少女」を区別し、「少年」「少女」の純真無垢であることを称揚していた。また、『日本少年』『少女の友』は写生主義と童心主義を掲げて大人と子どもの文を区別し、子どもたちが大人の文を模倣することを禁止して、「少年」「少女」のありのままの文を作ることを推奨していた。いいかえると、大人と「少年」「少女」を区別して、「少年」「少女」の純真無垢であることを称揚していたのである。だからこそ、『日本少年』『少女の友』は、都市新中間層に支持されることになったのであった。

このように、「少年」「少女」のメディアは、読者獲得競争を繰り広げるなかで、ついに「少年」「少女」のイメージを明確化するに至った。『日本少年』『少女の友』は、「少年」「少女」を「大人」と異なるものとして、そして、「少年」「少女」を純真無垢なものとして形作っていった。さらに、『日本少年』『少女の友』は、子どもにふさわしい文体、および、子どもにふさわしい内容の文を明確化していったのであった。

『日本少年』『少女の友』は「少年」「少女」に関する知を明確化した。

1900、1910年代、『日本少年』においては有本芳水の少年詩が、『少女の友』においては星野水裏の少女詩が支持されていた。有本芳水の少年詩は、第一に文語定型詩、第二に悲哀を主題にしたものであった。そして、星野水裏の少女詩は、第一に口語自由詩、第二に悲哀を主題にしたものであった。

『日本少年』『少女の友』の少年少女詩の相違点は、『日本少年』の有本芳水の少年詩は文語定型詩、『少女の友』の星野水裏の少女詩は口語自由詩であったという点である。この相違点の背後にあったものを考えてみる。

1900、1910年代の『日本少年』『少女の友』は写生主義作文を支持していた。そして、『日本少年』『少女の友』の読者は、写生主義作文の教育を受けていた。ところが、有本芳水は、第一に形式主義作文の教育を受け、第二に形式主義作文を投書していた。そして、男子読者は有本芳水の少年詩を支持していた。

1900、1910年代は、形式主義作文から写生主義作文に移り変わる過渡期にあった。したがって、まだ形式主義作文の魅力は失われていなかった。だからこそ、男子読者は有本芳水の少年詩を支持していたのであった。また、朗吟をしていたのであった。

しかし女子読者は、星野水裏の少女詩を支持していた。形式主義作文の作文教育においては、男子読者にとっては、漢文体、漢文訓読体、和文体などのありとあらゆる文体を操ることが学歴獲得に結びついていた。しかし、女子読者にとっては、そうではなかった。したがって、女子読者は星野水裏の少女詩を支持していたのであった。そして、朗吟する女子読者は少数だったのであった。

また、『日本少年』『少女の友』の少年少女詩の共通点は、悲哀を主題にしていた点である。この共通点の背後にあったものを考えてみる。

1900、1910年代、「少年」も「少女」も、悲哀と結びつけられて把握されていた。したがって、男子が悲哀に浸ることも、女子が悲哀に浸ることも、ごくふつうのこととしてとらえられていた。東アジアの伝統においては、教養ある知識人には「公」(政治、漢文)と「私」(感傷、詩文)の充実が不可欠であるとされていた(齋藤希史『漢文脈と近代日本 もう一つの言葉の世界』NHK出版、2007年)。このことを踏まえると、その東アジアの伝統が1900、1910年代の「少年」の世界において存続していたと考えることができる。

さらに、1900、1910年代の『日本少年』『少女の友』の通信欄・文芸欄を見てみると、『日本少年』の男子読者は、名誉を獲得するために投書をしていたことがわかった。なぜなら、文芸作品が『日本少年』の文芸欄に載ると、家庭においても小・中学校においても称賛されるからであった。したがって、男子読者は本名で投書していたのであった。

男子読者が名誉を獲得しようとしていたのは、1900、1910年代が、形式主義作文から写生主義作文に移り変わる過渡期であったためであるとおもわれる。そして、この時期、教養ある知識人には、「公」(政治、漢文)と「私」(感傷、詩文)の充実が不可欠であるという、東アジアの伝統が生きていたためであると考えられる(齋藤希史『漢文脈と近代日本 もう一つの言葉の世界』NHK出版、2007年)。したがって、1920年代、作文教育が写生主義作文に移行して、かつ、その背後の東アジアの伝統が衰退していくことで、『日本少年』の投書文化は力を失ってい

くとおもわれる。その結果、『日本少年』は、『少年倶楽部』に敗北していくことになると考えられる。

一方、『少女の友』の女子読者は、名誉とは異なる利益を獲得するために投書をしてきたことがわかった。なぜなら、文芸作品が『少女の友』の文芸欄に載ると、家庭においても小・中学校においても称賛されることもあったが、批判されることもあったからであった。したがって、女子読者は筆名で投書していた。女子読者の獲得しようとしていた利益とは、第一は友人を得ること、第二は大勢のファンを得ること、第三はアイドル扱いをされること、第四は編集者と親しくなることである。第五は記念時計をもらって「常連投稿者」という記号を獲得すること、第六は愛読者大会で幹事になって同じように「常連投稿者」という記号を獲得することである。第七は常連投稿者から作家になる道を開拓することである。

なぜ『少女の友』の女子読者は雑誌を媒介にしたネットワークを作ることに力を入れていて、『日本少年』の男子読者は力を入れていなかったのだろうか。この違いが生まれたのは、『日本少年』の男子読者のほうが学校教育機関を媒介にしたネットワークを作ることに力を入れていたためであると考えられる。『日本少年』の男子読者は、都市新中間層の男子が多数を占めていた。そして、都市新中間層の男子は、学校教育機関に通う期間が長期化していた。だからこそ、都市新中間層の男子が力を入れていたのは、第一に学力、第二に学校教育機関を媒介にしたネットワークを獲得することであった。なぜかという、都市新中間層の男子は、進学するとき、あるいは、職業獲得するとき、あるいは、職業の世界で生き抜いていくとき、この学校教育機関で作ったネットワークを大いに利用することができたからであった。

一方、都市新中間層の女子には、学歴獲得と学歴獲得を媒介にした職業獲得はほとんど期待されていなかった。なぜなら、高等女学校卒業後、良妻賢母になることが期待されていたからであった。それゆえ、都市新中間層の女子にとっては、学校教育機関を媒介にしてネットワークを作ることは、男子ほど期待されていなかった。さらに、学校教育機関に通う期間が限られていたため、学校教育機関を媒介にしたネットワークを作る機会が限られていた。そのため、都市新中間層の女子は、雑誌を媒介にしたネットワークを作る方向に向かっていったのであった。

ただ、都市新中間層の女子は、保護者の援助で雑誌を購読できる期間さえ限られていた。なぜなら、先に見たように、都市新中間層の女子には、高等女学校卒業後、良妻賢母になることが期待されていたからであった。しかし、そうであるからこそ、都市新中間層の女子は、雑誌を媒介にしたネットワークを作ることに貪欲になっていたと考えることができる。いいかえると、学校教育機関を媒介にしたネットワークも、雑誌を媒介にしたネットワークも、作る時間が限られていたからこそ、その限られた時間のなかで、学校教育機関を媒介にしたネットワークと雑誌を媒介にしたネットワークを作ることに夢中になっていたと考えることができる。

また、都市新中間層の男子は、進学の場合に、あるいは、就職の場合に、全国の男子とネットワークを作ることができるが、進学の場合も、就職の場合も、そもそも得ることが難しかった都市新中間層の女子にとっては、全国の女子とネットワークを作ることが困難である。しかし、雑誌を媒介にしたネットワークでは、それを作ることができるのである。だからこそ、都市新中間層の女子は、雑誌を媒介にしたネットワークを作ることに夢中になっていたと考えることができる。つまり、都市新中間層の女子にとっては、遠方の女子を友人にする機会は、今後の人生で二度と得られないかもしれない機会なのである。だからこそ、都市新中間層の女子は、この絶好の機会を逃さなかったのではないかとおもわれるのである。

このように、都市新中間層の女子は、ネットワークを作る時間、機会が乏しかったからこそ、限られた時間、機会を最大限に掴み取ろうとして、雑誌を媒介にしたネットワークを作ることに夢中になっていたのである。

雑誌を媒介にしたネットワークを作ることは、作家になるという道を開拓することにつながっている。ただし、その道は険しい道である。現実には、女子投稿者が作家になることは困難であったとおもわれる。しかし、女子投稿者のなかには、第二の北川千代子になることをめざして、雑誌を媒介にしたネットワークを作っていた女子投稿者が存在したのではないかとおもわれる。そして、1920、1930年代、そのような女子投稿者がますます増加したのではないかとおもわれる。なぜなら、『少女の友』に掲載されていた伝記を見ると、1920年を境に、芸術家が掲載されるようになってきているからである。そして、この芸術家の一つが少女小説家であったからである。さらに、1930年代、カリスマ少女小説家として脚光を浴びることになる吉屋信子が彗星のようにあらわれて、『少女の友』のグラビアを飾るようになるからである。これこそ、『少女の友』の功名な戦略であったとおもわれる。『少女の友』は、少女小説家というスターを作り出した。その頂点に君臨していたのは、1910年代は北川千代子、1920年代は横山美智子、1930年代は吉屋信子であった。そして、スターの少女小説家と女子読者の間に、アイドルの常連投稿者を作り出した。このように、『少女の友』は、スター、および、アイドルを作り出すことで、女子投稿者の欲望をかきたてていたのである。そして、女子投稿者に、『少女の友』を購読させて、投書をさせていたのである。だからこそ、『少女の友』は、1920年代になっても、投書文化を衰えさせることはなかったのである。そして、『少年倶楽部』に完全に敗北することはなかったのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 今田絵里香	4. 巻 58
2. 論文標題 東京都立高等学校の男女別定員と日比谷高等学校の男女共学制の導入	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 成蹊大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 21-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計6件

1. 著者名 有富純也・今田絵里香・他（全14名）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 『歴史の蹊、史料の杜 史資料体験が開く日本史・世界史の扉』	

1. 著者名 小山静子・前川直哉・須田珠生・和崎光太郎・今田絵里香・他（全10名）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 六花出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 『男女共学の成立 受容の多様性とジェンダー』	

1. 著者名 赤上裕幸・飯田豊・井川充雄・井上義和・茨木正治・今田絵里香・他（全70名）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 912
3. 書名 『江戸川乱歩大事典』	

1. 著者名 神野由紀・辻泉・飯田 豊・山崎明子・今田絵里香・中川麻子・塩谷昌之・松井広志・佐藤彰宣・溝尻真也・塩見翔	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 372
3. 書名 『趣味とジェンダー 手づくり と 自作 の近代』	

1. 著者名 今田絵里香	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 520
3. 書名 『「少年」「少女」の誕生』	

1. 著者名 小林盾・川端健嗣・今田絵里香・谷本奈穂・渡邊大輔・大崎裕子・森田厚・山田昌弘・佐藤嘉倫・森いづみ・ホメリヒ カローラ・金井雅之・筒井淳也・数土直紀・今田高俊・内藤準・香川めい	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 286
3. 書名 変貌する恋愛と結婚	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------